

平成14年5月18日（土）・26日（日）

第三〇三回 史跡めぐり 資料

陽光の鎌倉 材木座海岸 大町

越谷市郷土研究会

越谷市
郷土
研究会

第303回 史跡めぐり

陽光の鎌倉 鎌倉駅から材木座海岸

とき 平成14年5月18日(土)・26日(日)

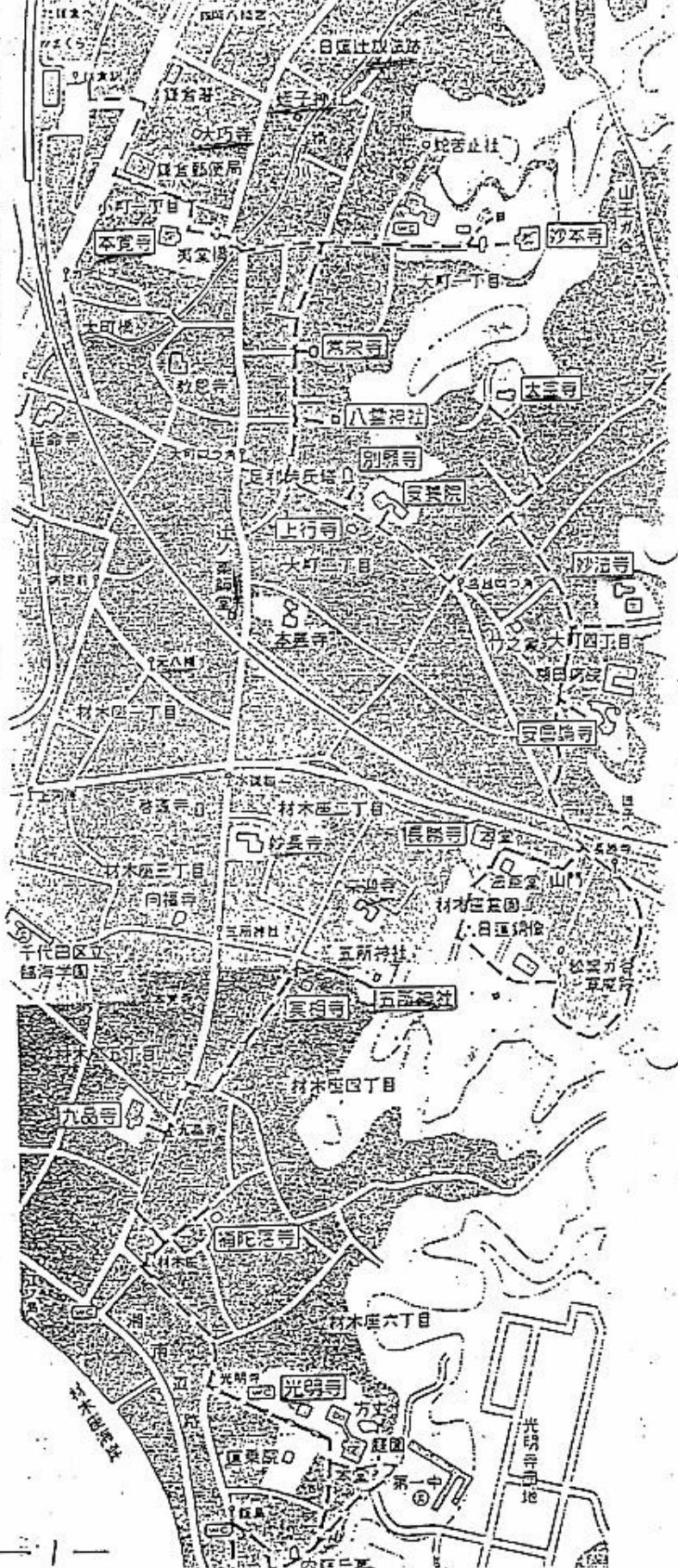
集合 J R 南越谷駅前 午前8時

帰着 " 午後6時ごろ

1. 大巧寺
2. 日蓮辻説法跡
3. 綾子神社
4. 本覚寺 夷堂橋
5. 妙本寺 蛇苦止明神
6. ぼたもち寺(常榮寺)
7. 本興寺 逆川橋 亂橋
8. 辻ノ裏師堂
9. 元八幡
10. 妙長寺
11. 九品寺
12. 材木座海岸
13. 光明寺 内藤家墓所
14. 补陀落寺
15. 実相寺
16. 五所神社
17. 來迎寺
18. 長勝寺 野井宿跡
19. 安國論寺
20. 妙法寺
21. 大宝寺
22. 安養院
23. 別願寺
24. 八雲神社
25. 小町通り散策

参加費 4,500円

ご案内 韓事 宮川 進



・小町

二階堂・淨明寺・十二所の大薦鄉が源氏ゆかりの地というならば、小町・大町・村木座はまた日蓮上人ゆかりの地ともいふべきでしょ。

安房から渡って来て狂人坊主とののしられた日蓮坊が、始めて雨露をしのいだのが名越の松葉ヶ谷でした。その法華宗開教のデモンストレーションを行つたところが小町の辻です。

坂本日喜の『凡下勤』を読んでいたら、小町・比企・名越・乱橋は「日蓮の里」と書いてあります。つまりこの小町・大町は日蓮上人を無にしては語れません。建長五年（一一五二）安房国（千葉県）から三浦の米が浜（横須賀）に小さな舟が一せき着き、一人の青年僧がそこにおりたちました。その衣服はさうことに簡素でしたが、眼は美しく澄み、唇の引きしまった好感のもてる青年でした。

鎌倉時代は、大町や小町は町屋といつてたいへんなにきわいであったことは、『吾妻鏡』や『絵

草紙』など聞くとよくわかります。そのなかで特ににきわったところが小町の辻でした。

田蓮辻説法跡

安房から渡って来た、さきの日蓮は、この辻に立つて毎日、「煩惱音提・生死即涅槃」「南無妙法蓮華經」と唱え、つまり恋人どうしが会うときも、「南無妙法蓮華經」とこう唱えなさい、人生のいろいろの悩みや、執着は、そのまま借りだと思ひなさい、法華經を信することは、武士にあっても、「罪業を捨てずして仏道を成じます。成仏とは自分をよく知ることだ」と説いて、「法華宗」つまり日蓮開教のデモンストレーションを行いました。

いわばこの日蓮辻説法の跡、小町の辻は日蓮開教の第一のメッカというべきところです。日蓮は、雨の日も風の日も、この辻に現われて「政治が正しくなければ國も庶民の生活も安んずることはできませぬ」また「為政者が、邪法を信じ、正

しい法華經をないがしろにすれば『自昇叛逆・他國侵逼』となつて日本は滅亡する」と予言しました。ときに日蓮は三十八歳でした。

日蓮が、この辺に現われたころは、日本国内い

たるところ、天変地変が相ついで起つていまし

た。風水害に痛めつけられたとおもうと疫病がまんえんし、地震が起り大火に追われ、田畠はかんばつに見舞われて、京都では、火つけ強盗、追いはぎ、劫火が町をなめつくしました。世はまさに飢餓地獄でした。

当時の仏教は、公家方か武家方について、庶民大衆が今日の糧にも迷うなかを僧たちは豪奢な生活にひたっていました。「脱黄族仏教」を唱えた日蓮は、それらの天変地災に苦しむ庶民大衆の心の飢えをみたしてゆきました。

日蓮の胸中には憂国の至情、名もなき大衆への愛情がたぎり立っていたのです。

そして「安房から来た狂い坊主よ——」とののしつて、日蓮に石つぶてをなげつけたこれら大衆も、いつしか日蓮の膝下にひざまずいて、口々に

「南無妙法蓮華經」と合唱をはじめました。日蓮は、絶対的な平和主義者でした。また無抵抗主義者で、たいへんな教養をもつた学研者で情熱的な実践者でした。

● 大町

日朝さまでの前の夷堂橋を渡ると大町です。『風土記稿』を見ますと、大町は商売が多少をもつて夷堂橋を境とし、以北を小町、以前を大町としたとあります。この大町も小町と同じく日蓮宗の寺院が多いところです。

夷堂橋を渡ると左がわに題曰と「妙本寺」と書いた大きな華表が建っています。またその参道の彼方に総門が見えます。この長い広い参道のある左右前後の地が『十六夜日記』にもある比企ヶ谷です。阿彌陀の歌に、

忍びねはひきのやつなるほととぎす雲のにた
かくいつかなのらむ

大巧寺

駅前の若宮大路の交差点の向いに見える赤い門の寺が大巧寺です。山号は長慶山正覚院大行寺といつて、昔は十二所にあって源頼朝の祈願所の一つでした。赤い門は将軍家ゆかりのしるしです。あるとき頼朝がこの寺で冥誕を開いて大膳したので大巧寺と改めだと『風土記稿』にあります。のち住僧が日蓮上人に帰依して改宗。日証上人が開山となつて比企ヶ谷の妙本寺の院家となり、元応二年（一三二〇）さきの十二所からこの小町に移しました。またこの大巧寺は通称「おんめさま」といって安産のお守りで有名です。

むかし、五世の日涼上人が妙本寺にゆかれた帰途、灵堂橋のところで産女の亡靈に逢われました。その産女は難産の苦言地獄からいままだまぬがれることができないでいると申します。上人はそれを哀れと思い、回向してその苦惱をのぞかれますと、女はたいそう喜んで一包みの沙金を捧げて厚く御礼を申しのべました。上人は、その沙金で

宝塔を造り、産女の靈を手厚く祀りました。爾來、この産女さまにお参りしてお札をいただくと必ず安産するといいます。

エチケット守つてきょう一日をきらに楽しく

◎畠草の座席は想りあつて一人でも多く座れるようになると協力ください。

◎道路は郷土研究会の専用道路ではありません。

地元の方の生活の邪魔にならないように！

◎史跡めぐりは「回体行動」です。ムードにひとりながら、ゆっぐりとも歩きになりたい気持ちはわかりますが、今日は「みんなのベース」にあわせてください。わがまま歩きは、お友達と次の機会にーー。

本覚寺

鎌倉を出て、郵便局の横の道をのぼったところに妙巣山本覚寺があります。町の人々は通称「日朝さま」と、親しみをこめてこう呼んでいます。大町の人も小町の人も、この日朝さまの境内を朝夕に通り過ぎて行きます。そして「百日紅」の美しい花を仰いで「ああ夏だなア」といって行きます。まちの人々は、この寺がなんとなく好きのようです。

この日朝さまは、別に東身延といわれています。文永十一年（一二七四）、日蓮上人が配流をゆるされて佐渡から帰つて来て滞在した旧跡と伝えられ、上人自筆の「消息文」などが寺宝としてあります。開山は日出上人。日蓮上人は第二世です。本堂わきに祖師日蓮の分骨堂があり、これが別称東身延の名を由来します。

この本覚寺を日朝さまと呼ぶやんは、この本堂に安置されている上人の木像にまつわる話によ

ります。日朝上人は永い間眼をわずらい苦しみました。のち、ぜひ眼の不自由な人のためになりたいといって寂されました。以来日朝さまの木像に願をかけるとよく眼病が治癒したといわれます。



中央には本堂があり、南北朝期の宗迦三尊像や日蓮像・日朝像が安置されている。本堂のわきには祖師日蓮の分骨堂があり、本堂の前方には鐘楼・冥堂・仁王門が並んでいる。鐘楼の梵鐘は日出が上総木更津の八幡宮

本覚寺冥堂

での論争に勝つてもちかえったもので、「応永17（1410）年」の銘が記されている。墓地には刀工岡崎五郎正宗の墓といわれるものがある。現在の冥堂は最近復興された建物で、鎌倉・江ノ島七福神の一つに数えられる古い冥神を祀っている。

この場所は鎌倉時代幕府の守護神として祀られていた冥堂があったところで、日蓮が佐渡の配所から鎌倉にもどったとき、しばらくここに滞在していたといわれている。

刀匠岡崎五郎正宗

本覚寺には岡崎五郎入道正宗の墓があります。

正宗は、貞応（一一二一—一三三）の頃に生れた刀工です。父は相模の刀匠藤三郎行光といい、五郎は稚なくして母を失ない繼母によつて育ちました。

五郎はその母が病にかかつたとき、雪の夜ひそかに水垢離を取つて「お母さまの病が一日も早く治りますように」祈つたと『日本刀工伝』にあります。やがて五郎は成人して、当時の名匠とうたわれた新藤五国光に弟子入つて刀法を学び、その後、諸國を回國修業して相州刀を完成しました。また正宗は日蓮に帰依してその精神を刀法の上にあらわしました。

正宗はよく弟子たちに、太刀は人を斬るものではない、太刀は天下を治め、國を鎮め、人の心を正しく導くものだと云いました。正宗の幾人かの弟子たちはよくそれをまもつたと『刀工伝』にあります。

五郎正宗の門下には、貞宗・村正ら正門十哲と呼ばれる名工を輩出しました。

また佐介ヶ谷の入り口付近には谷に正宗屋敷といわれるところと、正宗がその水で刀を鍛えたと称する「正宗の井」があります。

存在が明らかになるのは鎌倉後期に入つてからで、新藤五国光の出現による。こ



の國光は、京都栗田口から鎌倉へ移住した國綱の子といわれ、短刀を最も得意としたといわれる。作刀は永仁元年（一二九三）から始まるといわれる。

開基は比企大三郎能本、開山は千葉平氏出自の日朗上人です。ここは一代将軍源頼家の夫人であった若狭局の父、比企能員の屋敷あとでした。

二代将軍頼家は、北条の専横をいたくにくみました。が、かえって北条一族の術策において能員は名越に招かれて謀殺され、頼家の長子一幡は母とともにこの家にいて北条の軍兵のために焼討ちされ、その兵火の中であわれた最後をとげたところです。

いま石段をのぼり山門を入れると右手に一幡の小さな墓があります。人々は「一幡の袖塚」と呼んで、いまも四季おりおりの花や香を手向けています。成人すれば当然に将軍となるべき一幡でしたが、その芽をばむざんに摘ませたのが祖母の政子でした。その父の頼家を伊豆に幽閉したのも政子でした。頼家はそこで鎌倉からおくられた刺客のために、風呂に入ったところを殺されました。

承久元年（一一一九）正月、兄頼家のあとを繼

いだ三代将軍実朝も没すると、頼家の娘の竹ノ御所媛子が、四代将軍藤原頼経の夫人となつてここに住みました。

その頃、能員の末子の大三郎能本は、順徳上皇に仕えて佐渡に配されましたが、やがて媛子のはからいで鎌倉に呼ばれて武威の国にある父の旧領を安堵されました。のち能本は日蓮上人に帰依し、その弟子となり、師の日蓮のために一族所縁のこの地に一寺を建てて長興山妙本寺と名づけました。

長興は、北条時政のために名越の北条館で謀殺された父能員の法号、妙本は、むさんにもこの比企ヶ谷の屋敷で姫若狭や、甥の一幡とともに北条氏によって焼きいろされた母の法名でした。

憎惡の火、鎌倉を焼く

『吾妻鏡』はこのときの経緯をこう書いている。一一〇三(慶仁三)年八月二十七日、將軍頼家がいよいよ危篤に陥ったので、相続のことが相談され、関東二十八カ國の地頭職と惣守護職を一万に、関西三十八カ國の地頭職を二万に譲ることになった。ところが一万の外祖父比企龍員はこれに不満を持ち、千方百計その外戚である北条氏を亡きものにしようと、兵を集めはじめた。かくて鎌倉には双方に味方する武士が差れ、駿然たる状態になって来た。

九月一日、頼家の病床につきそっていた若狭局が、頼家に訴えた。

「このままでは北条にやられてしまします。一万の行末が心許のうござります」

頼家は驚いて比企龍員を招き、ひそかに北条討滅の計画を練った。ところが、この密談を母の政子が障子を蹴って聞きつけてしまった。政子は手紙を認め、侍女を走らせて、時政に急を告げる。折ふし御所を出て、名越にある本邸に帰る途中だった時政は、手紙を見て思案の末、大江広元の邸に寄つて相談する。

が、広元の答は慎重だった。

「故將軍家の時以来、御政道の事については御助け申し上げて来ましたが、戦さの事は何とも……。ま、あなたの御判断でなされることですな」

ていよく逃げをうつたのである。時政はまだ決心がつかない。広元の邸を出たものの、まだ馬上で思い悩んでいたが、とうとう従つていた天野遠景と新田忠常と計画を打明けた。

「やりましょう！」

二人は即座に答えた。

「なあに、能員こときを討つのに、軍兵を動かす必要はありませんよ」

名越の邸に戻つて、秘策が練られた。大江広元も迎えをうけて出かけてゆく。先刻態度を鮮明にしなかったので、広元の所から比企側に情報が漏れはしないかと警戒し、口止めする意味で呼びよせられたものと思われる。慌しい動きがあつた後、僕が比企龍員の許にさしむけられた。

「將軍家の御病氣平癒祈願のため、薬師仏供養を行います。なにとぞ御来臨下されたい」

能員の息子たちは警戒して行くのを止めたと。いう。

「どうしても行かれるなら、相応の武装をし、家子郎従を従えてゆくべきです」

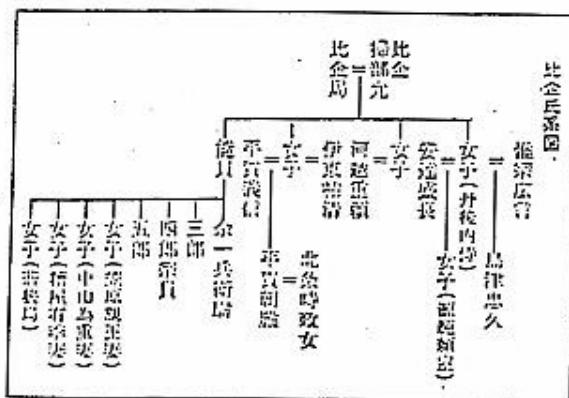
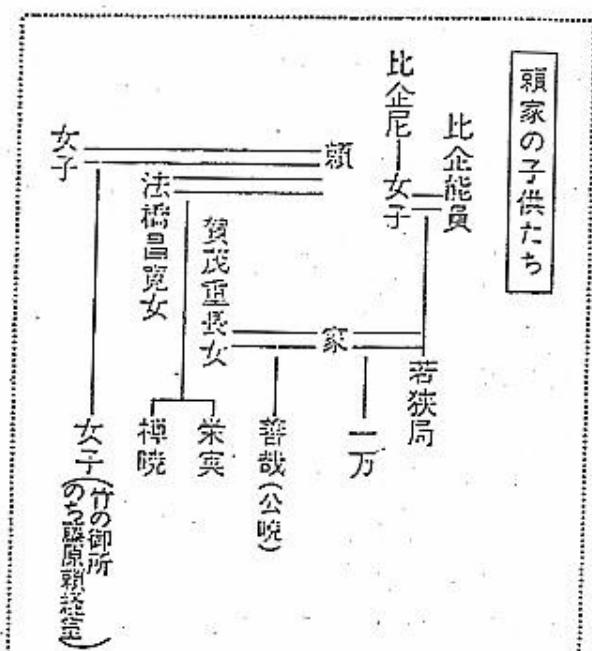
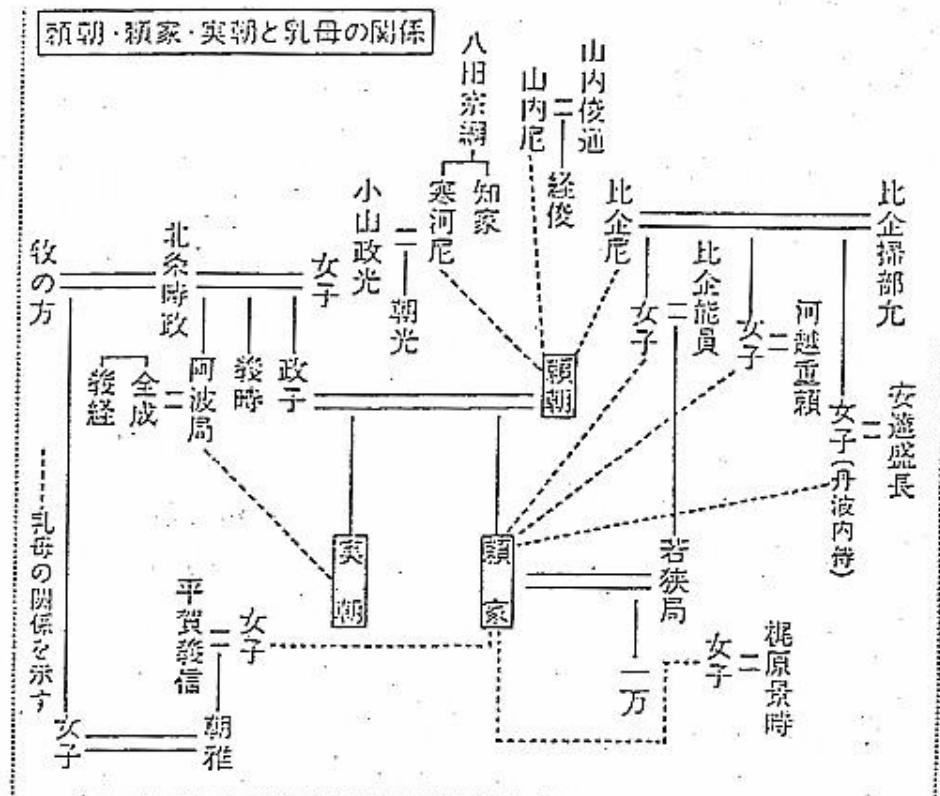
が、能員はそれを聽かず、武具もつけず、仏事にふさわしい礼装をし、数人の供だけ連れて出かけていった。能員が北条邸に入るやいなや、物蔭にかくれていた天野遠景と新田忠常は、やにわに彼の両手をむすと掴み、竹藪に引入れて、刺殺してしまった……。

このところの『吾妻鏡』の描写には思づまるようなものがあるが、中でもこの部分は、

「誅戮蹟ラ廻ラサズ」

とこれ以上簡潔にはできない書き方でその一瞬を表現している。漢文の持つ迫力であろう（もつともこれには古典に似たような表現があるので手放しに感心もできないが）。

能員の非業の死を知った従者は宙を飛んで比企の館に急を告げる。と、時をおかず、「尼御台所の仰せ」をよりかざして、北条時政の子、義時は北条一族、小山、三浦、畠山らが攻めこんで来た。不意を衝かれた比企方の劣勢は蔽うべくもないが、それでも彼らは勇敢に戦い、攻め手にかなりの痛手を負わせた。戦闘は午後二時から四時頃までおよんだという。敗色の濃くなつて來たとき館に火が放たれた。その中で比企の息子たち、娘の婿たちも自殺し、若狭局も一万も炎の中に死んでいった。



文学の中の妙本寺 また鎌倉ではこの妙本寺は

詩や歌や、創作に取り

入れられたところは他にはないといえます。国木

田独歩は「妙本寺懷古」を作りました。佐佐木信

綱は「仙覺律師」を書きました。また先に物故さ

れた作家の小林秀雄と詩人の中原中也もこの妙本

寺の庭を愛しました。小林は「中原中也の想い

出」のなかで、中也と長谷川翠子という女性を中

に争って恋に敗れた中也とこの妙本寺に来て、二

人は、寺のきさはしに海棠の花の散るのを黙つて

見ているところがあります。中也是その後こちら

を狂わせ、病にさいなまれて没しました。また京

洋一と称されたその海棠の木も、中也の死を悼む

ようにいくばくもなくして枯れました。

そのほかに泉鏡花・高山樗牛や、久米正雄・菊池寛・高浜虚子・蒲原有明・福田正夫・高村光太郎・松本たかし・吉野秀雄・大仏次郎などが多く

の作品をこしました。

蛇苦止明神

妙本寺境内の蛇苦止明神は、若狭局を祭神としています。さきの一幡の母、二代将軍頼家の妻

は、わが子と頼朝の末子千幡との家督相続争いが

端を発して北条氏のためにわが子の一幡がこの小

御所で焼討ちされたことに憤つて身を池に投じて

大蛇になったといわれます。のち日蓮上人によつ

て、その苦思が救われて鎮められたのがこの「蛇

苦止明神」といいます。また別書に、文応（一二

六〇）の頃、北条政村の娘が毎夜、さきの若狭局

が大蛇になって苦しむのを夢に見て、題田を唱えて法華經の功德によつてその苦しみをのぞいて祀つたのがこの蛇苦止明神だと伝えます。

岡本綺堂の「修善寺物語」は、この若狭局と面師の夜叉王と、その娘の「桂」のことを書いた物語です。

一武運つたなき頼家の身近うまいがそれほど嬉しいか、そもそも大方存じとおろう、予には、

比企判官能員の娘、若狭と云へる側女ありしが、能員はろびし其のみぎり、不懶や若狭も世を去つた。

今より後はそちが二代の側女、名もそのままに若狭と云へ——

これは、頬家が面作りの夜叉王の娘、桂に云うところです。この作品が明治座で上演されたのが明治四十三年の五月でした。この作品はたいへんな人気を呼びました。その時間になると一幕見の客が、明治座前の河岸に列をつくって並ぶという盛況でした。作者鷗堂四十歳、市川左団次三十二歳でした。以来この蛇舌止明神に鷗堂も左団次も毎年お参りしたといわれます。

仙覚は万葉集の研究者として有名な人です。将軍頬経の師の親行のもとで万葉集を見て、その研究に志したのが寛元三年（一一四五）四十三歳のときでした。まず師の「河内本万葉集」を底本として他の証本をもって校訂しました。建長五年（一二五三）十一月、仙覚は寛元四年に抄出して新点を加えたものを奏覽状と共に師のすいせんによって後嵯峨上皇に献上しました。ときに仙覚五十一歳でした。

上皇は、この新訓を賞されて御製一首を仙覚に賜ります。その仙覚の『万葉註釈』が完成したのが文永六年（一二六九）の春でした。その奥書に「文永六年三月於武藏国比企郡麻師宇郷書写政所之畢仙覚在判」と見えます。仙覚はその三年のうち、文永九年（一二七二）の六月にさきの麻師宇（埼玉県小川町）に没しました。

新駅迦堂　むかし、妙本寺の裏に竹ノ御所様子
が、わが父の頬家や母の若狭と兄一
幡・千寿の靈をとむらうために、一堂を建てました。その本尊の駅迦は実朝に渡宋の夢をもたらせた宋人陳和卿の作といわれます。また、この駅迦堂の供僧に仙覚が武藏国から呼ばれました。

常榮寺

妙本寺の総門の横を右に入ると、常榮寺の前に出ます。その前をさらに進むと八雲神社から横須賀・三浦街道に出て、常榮寺は通称「ほたもち寺」といわれます。その由来は、ここに住んでいた棧敷尼という老女が、日蓮上人が龍ノ口の刑場に引かれて行くとき、「ほたもち」を作つて供養したところからそう呼ばれると野史に見えます。

この棧敷尼は、和田一族の兵衛左衛門尉という人の妻でした。この地は、かつて源頼朝が浜見のためにやぐらを組んだところといわれて、いつしか棧敷屋敷と呼ばれ、つまり棧敷尼は棧敷屋敷の尼という意味なのです。

慶長十二年（一六〇七）妙本寺十四世の日詔上人が一寺を建てて尼の法名にちなんで東雲山常榮寺としました。また中興の開山を慶雲院日祐といいます。日祐尼の父水野淡路守忠良は紀伊国（和歌山県）は新宮の城主で、三万五千石を食封していました。

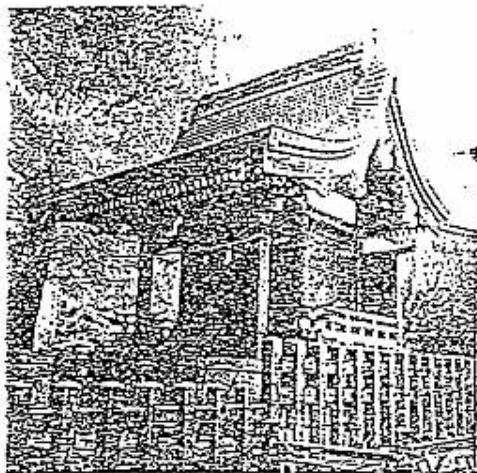
魚町橋から一〇〇m先、左側のすつと伸びたイチヨウの木の下には、日蓮宗法華山本興寺がある。創建は一三四五年で、開山は天目とも曰什とも伝えられる。門前には日蓮聖人辯説法跡の碑が見える。

本興寺の先で道は高くなり、横須賀線の三浦道踏切にさしかかるが、そのすぐ手前右側に、辻ノ薬師堂と呼ばれる小堂がある。七二五年ごろ由比の長者染屋時忠は、真言宗医王山長善寺を建てた。その後寺は薬師堂だけを残して焼失し、いつのころかここに移されたという。電車が通るたび激しく揺れる堂内には平安時代作の薬師三尊と鎌倉時代作の十二神将が並び祭られている。

元八幡

妙長寺の前の道の手前には、鎌倉十橋の一つ乱橋があり、その橋をわたってさらに北へすすんだ左側の細い道の奥にこじんまりとした社の元八幡（国史跡）がある。この社は、源頼義が前九年の役（1051～62年）で兵州の安倍頼時・貞任父子を討って京へ帰る途中の1063（康平6）年に鎌倉に立ち寄り、由比郷鶴岡のこの地に京都の石清水八幡宮の祭神を勧請してつくられたといわれている。頼義の子義家は後三年の役（1083～87年）で奥州へ行く途中の1081（永保元）年に参詣して社殿を修理し、源氏の氏神として尊崇

したという。鎌倉に居を定めた源頼朝が1180（治承4）年に現在の八幡宮の小林郷北山に社殿を移してから、元八幡と呼ぶようになったが、正しくは由比若宮である。この社にくる途中に石清水の井と呼ばれる井戸があって、石清水八幡宮とのつながりを伝えている。



元八幡（由比若宮）

源氏（清和源氏） 略年表

清和天皇---貞親親王---源兼吉---源仲---



義平(源頼太)		
(1) 植嗣 (1192~99)	(2) 植宗 (1202~1203)	一 植九
一 植嗣(清冠者)	(3) 夷朝 (1203~19)	一 公継
一 善臣(植九郎)		一 女子(藤原植昌妻)
一 女子(一条能保妻)		

妙長寺と泉鏡花

九品寺

海潮山妙長寺は、初め材木座の沼浦に日寛上人によつて、日蓮が伊豆に配流の船出の靈場として開かれました。のち元和元年（一六一五）に津波の被害をうけて現在地に移されました。

山門を入れると「日蓮聖人伊豆法難記念」と彫つた大きな相輪の塔が建っています。この石柱は関東大震災のとき倒れた鶴岡八幡宮の第一の大鳥居の一部で、「寛文八年八月十五日御亭興」の銘があります。本尊は祖師日蓮と三宝四菩薩です。また寺内開山の日寛・日朗などの坐像が置かれていました。

明治二十三年、北陸英和学校を中退して小説家にあこがれて金沢から出てきた泉鏡花が、一夏をすこしてその处女作「冠弥左衛門」を書き上げました。これは明治十一年に平塚在に起きた「真土村松木事件」を主材にしたもののです。

先年、この九品寺の近くから鎌倉の頃のたくさんの人々の遺骨が出土しました。男も女も幼児までが頭を刃で打ち割られていきました。

『太平記』に「浜面の在家、ならびに稻瀬川の東西に火を懸けたれば、をりふし浜風はげしく吹きひて車輪の如くなる災し黒煙りの中に飛びちつて、十町二十町が外に燃えつくこと同時に二十余ヶ所なり。猛火の下より源氏（新田）の兵乱入りて——に迷へる女、童とも追ひ立てられて火の中、掘の底ともいはず逃げ倒れたるありさまざま語るに言葉も更になく聞くに哀れを催して皆なみだにぞ咽びける」とあります。

義貞は建武二年（一三三二）、ここに一寺を建て自から「内裏山九品寺」の額を書きさせました。開山は紀主念阿。本尊は弥陀三尊。寺内に永仁四年（一一九六）の銘のある「石蔵歸」があります。

●材木座

辻の薬師の踏切りを越えると、そこから南が材木座です。この材木座大路に入ると、つーんと汐の香が流れてきて、『いよいよ鎌倉の海岸』と行人の旅心になんともいえない旅愁を誘います。

むかし、ここに紀州や尾張の材木が運ばれています市が立ちました。その頃の材木座は、小坪・三浦街道に面して、酒屋・豆腐屋・雑貨屋その他が、いりまじつた、寺ばかり多い漁村という感じでした。

はじめて、ここに別荘を建てたのは吉井勇の祖父友実でした。吉井別荘ができると、追いおい東京から人々が材木座に移ってきました。

またこの材木座の海は、永いあいだいろんな喜びや悲しみを歴史のなかに眺めてきました。源頼朝は義経の愛人静の生んだ嬰児をこの海に頭をひねつて捨てさせます。将軍頼家は、この海岸で武技の会を開いたが、間もなく修善寺に送られて非業な死をとげました。和田義盛も北条のためにはかられて、ついに滑川で敗死しました。

捕陀洛寺

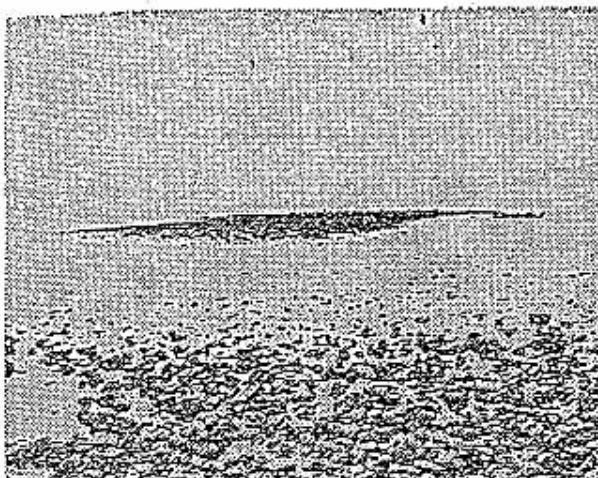
この浜辺の街にもう一つ寺があります。材木座の海からあがって葛屋酒店と伊勢屋菓子店の間の道を入ると、南向山帰命院捕陀洛寺という古義真言の寺です。

開山は謡曲「恋塚」の主人公、友人の渡辺亘の妻の袈裟を斬って仏門に入った荒法師高尾文覚です。開基は源頼朝。養和元年(一一八一)文覚は鎌倉に来てはじめてこの寺を持ちました。本尊は十一面觀音です。『風土記稿』には不動明王。『鎌倉志』には薬師如来を本尊としています。

はじめ、捕陀洛寺は七堂伽藍に造った寺で、大臣郡は北畠の武士の遠藤武者左衛門尉為盛でした。
後卷でやくねる

和賀江島

『東闕紀行』には「和賀江の築島」とあります。また江戸時代の俳諧帳に「和歌絵島」と見えます。その和賀江島は、貞永元年（一一三一）の七月、往阿といふ僧が北条泰時にたのまれて築いたものです。



和賀江島（鎌倉市材木座）

往阿弥陀仏についても、人となり事績などは未詳である。当時、社会事業などに活躍した念佛僧と思われるが、筑前國（福岡県）宗像神社にのこる記録によるところ、和賀江島をつくる前年の寛喜三年（一一三一）四月、同國新宮浜の鐘ヶ崎に防波堤を構築しているので、全國のしかもべき町を訪ねては、同様の事業を企図し、これを助けていた人物とみられる。

しかし、往阿弥陀仏の努力にもかかわらず、大風や激浪があるたびに多くの舟船が難破したようで、仁治二年（一二四二）四月には大地震と南の強風で十艘ほどが破損し、弘長三年（一二六三）八月には大風のため、二度にわたって舟船が破損または漂没し、多くの人ひとが溺死した。

それでも、鎌倉の町の繁榮ぶりは由比ガ浜に集まる舟船の数によくあらわれていた。浜は、とくに鎌倉時代に重要な役割をない、鎌倉の海の玄関口として、あらゆる物資はもちろん、有能な人材をも迎え入れたことであろう。かつて、材木座海岸から中國宋の青磁の破片類を多く拾うことができたことなどは、中国

和賀江島築港以前にも船舶の寄港地としてにぎわい、商業の町がつくられていた。また鎌倉の運輸資材の集散地として材木商人が住み、鎌倉後期には座が形成されていた。この材木座が地名として残り、現在でも町名として使われている。

の交易があり、大陸の新しい文物・文化が直輸入されたことを物語るのである。元弘三年（一二九三）に鎌倉幕府が滅亡したのも、島は足利氏によって保護され、極楽寺が管理にあたって和賀江島の修築を行なっている。江戸時代には島の帰属をめぐって小坪と材木座両村が争い、島の石積を切り開くということもあつた。

現在、満潮になると、島姿は水面下に没してしまうが、この貴重な遺跡を、永遠に海底に沈めるようなことがあつてはならない。

光明寺

光明寺は桜の花の美しい寺です。鎌倉駅から京浜バスに乗って十分余りで行かれます。浄土宗関東十八檀林筆頭で、天照山蓮華院光明寺といいます。

寛元元年（一一四三）記主然阿良忠上人を開山として執権北条経時が創建した寺です。もとは蓮華寺といって小坂郷の佐介ヶ谷にありました。のち経時が靈夢を見てここに移して寺号を光明寺と改めたといわれます。

光明寺の巨大な山門を入ると、本堂と廬裡とのあいだに美しい庭園が見えます。この庭園は記主然阿良忠が裏山から水を引き、池を造られたので「記主庭園」と伝えます。またのちの人が庭園をつくって開山の名にちなんでつけたともいわれています。この記主庭園は、瑞泉寺の庭園と共に鎌倉第一の名園というべきでしょう。

この名園を愛してよく文人墨客がおとずれて歌

会・句会などを開きました。また、夏に入ると庭園に美しい蓮の花が開きます。蓮は大賀博士が発見された二千年前の種子から生まれた蓮です。

本堂を右に廻ると、みごとな石庭が造られています。御堂の縁に腰をおろして、庭に向ってまぶたをとじていて、自然と心が澄み透ってくる思いがし、石の庭は不思議な作用をかもします。

昭和二十年、日本の敗戦のために人々の心がたいへんに荒廃をして自信を失なつたとき、光明寺と鎌倉の文化人によって「鎌倉アカデミー」がここに設立されました。それはいろいろな理由で永くはつきませんでしたが、何かに飢え渴していた人々の心を救いました。「江分利高氏の優雅な生活」で直木賞を受賞した山口瞳もここに学んだ一人です。

光明寺は、こうした終戦後の文化の発生の源で

した。また光明寺には多くの名宝、國宝の「当麻曼荼羅縁起絵巻」二巻をはじめ、「淨祖五祖絵巻」「光明大師絵詞」「当麻曼荼羅図」などの重要文化財、その他が数多くあります。また蓮華院の内陣には月岡栄賞画伯ほか数名に成る格天井があります。

光明寺の庭を拝観して、寺後の丘にのぼると、開基北条経時の墓、開山良忠上人、また歴代住職の墓がならびます。また狂騒の詩人といわれた洋画家、長谷川利行の名作「冬の墓のある風景」はここを素材したといいます。

その後、徳川家康は光明寺を関東大権林（浄土宗の学問所）の正額と定めた。また、日向延岡藩主内藤氏の菩提寺となり、寺は榮栄を続けた。

二九 墓の臣
大な宝篋印塔を取り巻く石塔群は見事で目を見張らせる。



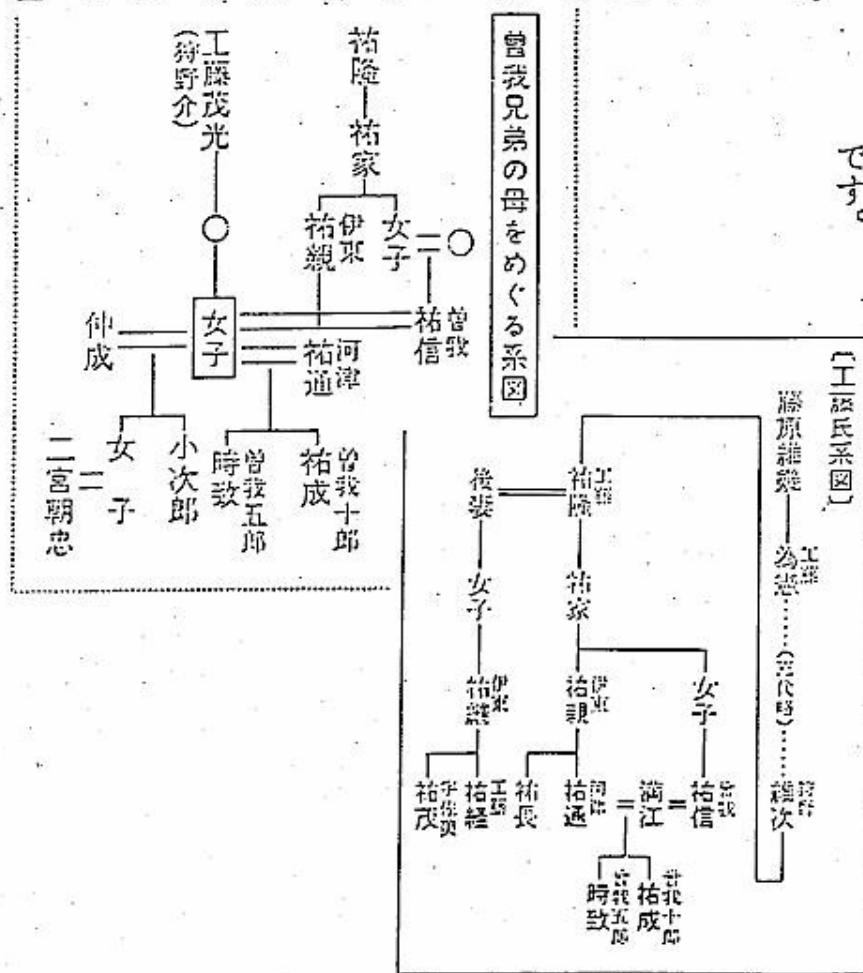
光明寺当麻曼荼羅縁起絵巻（部分）（国宝）。

宗祖寺

実相寺は、曾我物語の敵役工藤左衛門祐経の屋敷跡に外孫の弁阿闍梨日昭が開いた寺です。日蓮は、ここが海に近いので「浜院」と呼んだといいます。

を惜しんで一寺を再建して法華弘通の道場としました。しかし、これも永禄のころ、官命によって伊豆国玉沢に移されました。

その後しばらくして在地信徒によつてまたこの地に一字が建てられたのが、いまの弘延山寛相寺



実相寺はいまは伊豆玉沢（三島市）の妙法華寺の末寺ですが、その妙法華寺は文保元年（一一三七）大成弁日昭が、八十一歳のときこの地に開堂した寺です。それまではただ雨露をしのぐ小庵すぎませんでしたが、日昭の弟子たちや信徒たちが淨財を積んで、この寺を師の御坊のために建立したといいます。

のち元弘二年（1339）に新田義貞が上野に兵を起して鎌倉に討ち入ったとき、新田軍は頼朝以来繁栄をきわめた鎌倉を浜風を利用して焼き払います。このとき新田軍は、女子供老人といわず暴虐のかぎりをつくしました。妙法寺はそのときの兵災に焼かれて伊豆国金村に移りました。のち、日昭の弟子日祐の弟日英が、この浜殿の旧址

五所神社

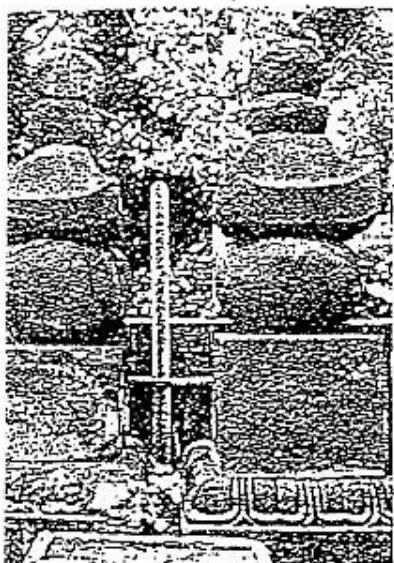
五所神社は材木座の総鎮守です。明治四十一
年、乱橋材木座村が大町と合併されて東鎌倉村と
なったとき、乱橋の三島神社、材木座の諏訪神社
と見目（視女）神社、琴比羅宮と八雲神社を合せ
て五所神社と改めました。またこの神社には大日
如来の種子を彫った重要美術品、弘長二年（一二
六二）十一月廿二日銘文の板碑と摩利支天の石仏
があります。

七月七日の例祭には、寛永十九年（一六四二）
修造としたけんらんたる神輿が街を練り、大
変なにぎわいをみせて若い娘たちの胸をときめか
せます。

来迎寺

来迎寺は五所神社の北隣りです。『風土記稿』
を開くと、来迎寺には三浦義明一族の墓と、宗祖
一遍上人の木像ならびに義明の坐像があるとみえ
ます。開山は一向、『鎌倉事典』には開山を音阿
としています。

この寺は初め治承四年（一一八〇）三浦の衣笠
合戦で戦死した三浦大介義明をとむらうために真
言の能成寺という寺が子の義村によってここに建
てられました。のち三浦氏の滅亡後、応永年中に
時宗に改め、音阿をもつて中興の開山としまし
た。本尊の阿弥陀三尊は義明の持仏といわれてい
ます。



仰寺三浦義明墓と多々良重春墓

長勝寺

長勝寺は、日蓮に帰依した幕府引付衆の一人石

井藤五郎長勝の屋敷跡にたてられた寺です。『鎌倉志』に「石井をもって山号とし長勝をして寺号とした」とあります。寺伝は開山を日蓮上人、石

井藤五郎長勝を開基としています。長勝は、当時幕府に使えた引付衆で最明寺入道時頼のとき左衛門尉となつた人で、のちに入道して日陰となりました。

長勝寺もまた前寺と同じく、日蓮が鎌倉に来て最初に小庵を結んだ由縁の地だとされています。まだ京都の本園寺旧地ともいわれています。

貞和元年（一三四五）、京に移った本園寺の跡に、足利尊氏の叔父に当る日静上人が寺を再興して石井山長勝寺と名づけたと「長勝寺由緒書」にあります。

本尊として宗祖日蓮上人と帝釈天を安置します。永享の乱で荒廃した七堂は、小田原北条氏に

よつて復興しました。そのとき本堂は、その臣の遠藤因幡守宗為によつて建立されました。

またこの長勝寺では、修業僧たちが毎年寒中の氷を割り、その水を頭から浴びて、人々の無病息災をお祈りする流行が行なわれます。

古老の話によると、明治のころ横須賀線が通るまでは、寺域は安国論寺の山すそまであつたそうです。またその山すそを旧道が東に走つて、まだ堂の切通しから逗子にぬけました。

彫刻家高村光雲作の日蓮上人の銅像が立っています。



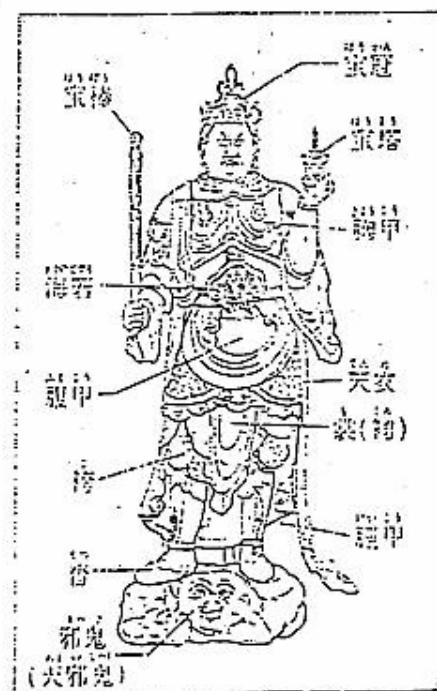
持雲天像（東大寺戒藏院、奈良県）天平時代、鑄造



增長天像（同左）



五道天像(附上)



多聞天像 昇沙門天像

妙法寺から額田病院の前をすぎると妙法山立正安國論寺に出てます。寺伝には、松葉ヶ谷小庵の跡と伝えてます。

当時の日本は、天変地変が相ついで起きて庶民大衆の生活は、とみに痛めつけられていました。風水害、疫病、地震、かんばつなどがつづいて餓饉地獄の中に庶民は生きる希望も絶たれています。それを見る日蓮には、心の安まる日はありませんでした。

こうしたなかで、日蓮は新しい仏教観を立てました。日蓮は昼は小町・米町の辻などに法華開教のデモンストレーションを行い、夜はわずかに雨露をしのぐこの小庵に坐つて『立正安國論』の草案を練りました。日蓮のこうした新しい宗旨開教には多くの迫害も生じました。夜討ち、暗討ち、そして焼討ちです。これに日蓮は絶対的な無抵抗をつらぬきました。

日蓮は仏祖にかわって、「法華經の行者」つま

赤とんぼ硯の水も無かりけり 高木喬梧



安國論寺

り愛の行者としてその三藏を拓して講筆したのが『立正安國論』でした。日蓮は、その一巻が成ると、ただちに時の執權北条時頼にそれを献じました。やがて頼迷な幕府は、日蓮をもともと危険思ひの持ち主として佐渡ヶ島に流誅し、この小庵は焼かれました。いま、日蓮の弟子の日朗が写したという『立正安國論』の一巻が寺宝として残されています。

妙法寺

妙法寺は松葉ヶ谷三ヶ寺の一つです。この地は建長五年（一一五三）の夏、宗祖日蓮が安房から渡つて来て、はじめて小庵をいとんだところです。いわば日蓮宗の最初の「精舎」でした。日蓮はここを基地として盛んに開宗説法を行います。

また、この妙法寺を別に苦寺といいます。本堂の三宝祖師を拝し、近世の名画板戸を拝観して敷石を踏みますと、樹間を渡つて肌にしむ風は苦の香をのせて、建武南北時代の哀れさを思い浮かべさせます。美しい庭の苔をさせて歩むと古びた仁王門があります。

そこから法華堂御廟にのぼる石段は、苦におおわれています。その美しい苔を踏まぬようにわき道をのぼり御堂にお参りし、さらに頂きにのぼると護良親王と御母南ノ方の、また法親王の墓があります。

大宝寺からもとの道を引き返してすぐ左折してしばらく行くと左奥に妙法寺（日蓮宗）がある。日蓮が1253（建長5）年に開いた松葉ヶ谷の草庵の跡と伝え、日蓮が鎌倉で法華経を広める拠点としたこの草庵は日蓮に反感をもっていた鎌倉の信臣や武士たちによって1260（文応元）年に焼き打ちされた。日蓮がこの草庵の跡に法華堂を建てたといわれ、これが本國寺で、日蓮宗最初の寺院といわれている。しかし本國寺が室町初期の1345（寛國6）年に京都に移築したため、本國寺の旧地が荒廃し、その跡に護良親王の遺子日叡が1357（正平12）年に寺院を再興し、これが妙法寺の起りといわれている。寺号は日叡の房号の妙法房からといわれる。江戸後期熊本の大名細川家が建てた本堂には祖師日蓮像をはじめ仏像が安置され、天井・らん間の絵や彫刻はみごとだ。本堂の右側の奥には仁王門があり、法華堂・釈迦堂跡に上る石段は苦の石段と呼ばれ、一面の緑の苔におおわれて美しい。境内の裏山の奥には、日蓮上人・護良親王・日叡上人らの墓塔がある。

大宝寺

大宝寺は応永六年（一三九九）に佐竹上総介義盛が出家して建立した寺といわれます。はじめは密宗でしたが、同二十九年上杉憲定の軍によつて佐竹屋敷とともに焼かれました。上総介常元は、兵火の中を脱出して比企ヶ谷の妙本寺にのがれて自刃しました。

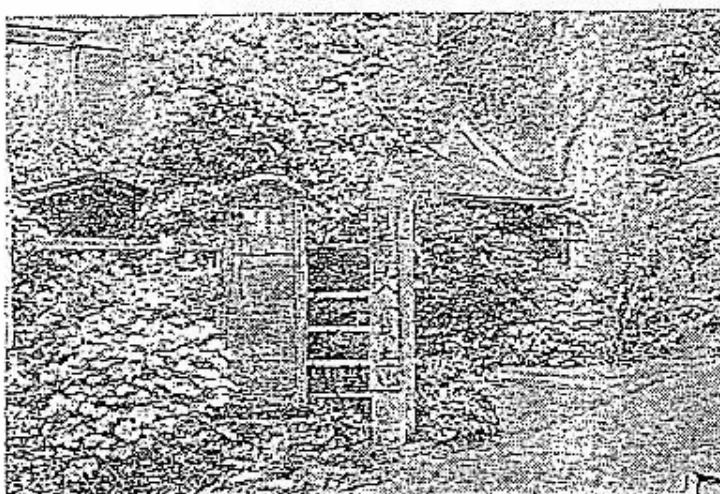
永享六年（一四三四）の頃、妙法院日出が、ゆえあってこの地に草庵を建てて常元一族靈廟とし、やがて文安のころ一寺に改めて多福山一乘院大宝寺としました。多福山は義盛の院号、一乘院は常元の法号によつたといいます。

日出上人は佐竹上総介貞義の孫、常陸介義春の次子といいます。幼なくして父にかわる兄を失ない、妙法寺に入つて稚髪します。やがて日出は、日蓮宗の教学・和学・漢籍・仏籍の内典外典に通じる学者として世に知られました。

文安二年（一四五五）日出は後花園院のお招きにあつたが固辞してゆかず、その生涯は名利を捨

てこの一小庵に一族一門の靈に仕えて長禄三年（一四五九）四月九日、花祭りの終えた翌日、この大宝寺にて円寂しました。

大宝寺は、本覚寺と同じ日出の創建になるが、もともとの地は新羅三郎義光の子孫佐竹氏が住んだところから、佐竹屋敷の名で呼ばれていた。いつたん寺を出て、さらに數十石道み、山の根で右へ山道を登つていくと、佐竹氏の祖常光の墓といわれる宝塚印塔がある。



安養院

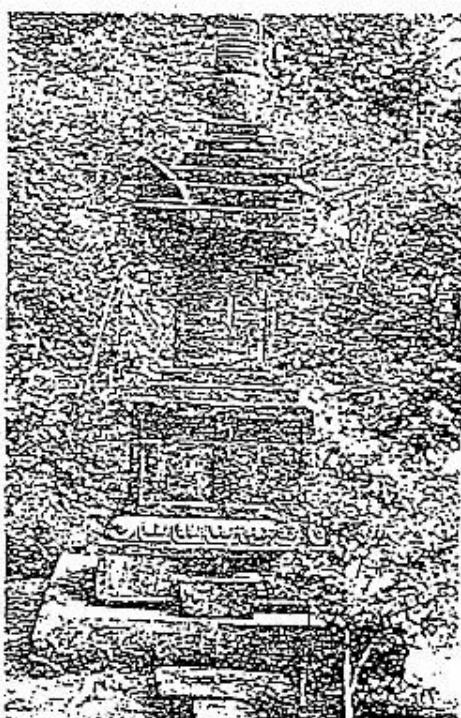
別願寺の東隣りが、花の寺の安養院です。山号を祇園山長楽寺といいます。

安養院は、北条政子が頼朝の菩提をとむらうたために、もと笹目ヶ谷に建てました。開山は大山の不動尊を鋤つた憲静願行です。はじめ律宗の寺で長樂寺といいましたが、新田義貞が元弘三年（一三三三）鎌倉に討ち入ったとき焼かれて方八町を寺域とした七堂伽藍を失なしました。のち、磨の高僧で淨土五祖の一人、善導和尚の像を安置してあつた善導寺あとに移って政子の法号にちなんで安養院と寺号を改めました。

以来安養院は淨土宗名越派の本山として栄えましたが、延宝四年（一六七六）の六月、徳川幕府の諸宗寺院本末改めによつて京都知恩院の末寺となります。戦後、淨土宗は從来の本末制度を解体して、いまは淨土宗神奈川教区に属します。本尊は阿弥陀如来。

堂内安置の千手觀音は、もと比企ヶ谷にあつた

白花山普明院の観音堂が延宝八年（一六八〇）に焼けたため、その観音をここに移したもので、別称田代観音といいます。で安養院を坂東観音靈場第三番の札所とします。また門前の地蔵を「日限地蔵」といつて南北朝時代のものです。



安養院宝篋印塔

地蔵堂には日限地蔵とか子安

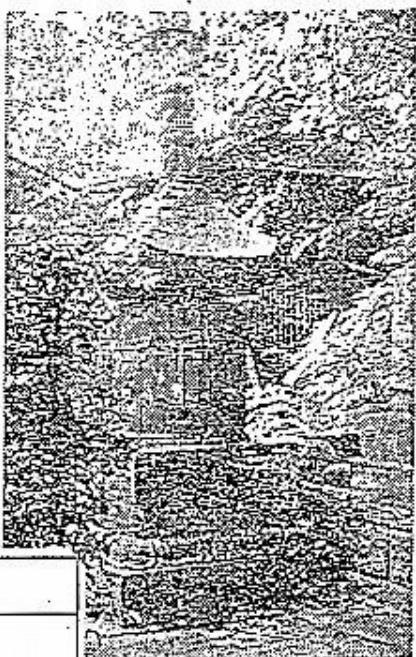
地蔵と呼ばれている石像の地蔵菩薩像があり、本堂の裏手には「德治3（1308）年」の銘がある大きな宝篋印塔（国重文）と政子の供養塔と呼ばれる小さな宝篋印塔が立っている。

別願寺

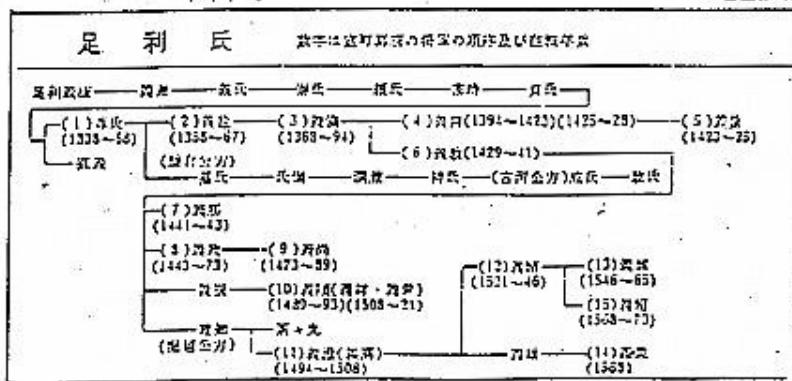
別願寺は、教恩寺と同じく時宗の寺です。古くは鎌倉公方家の足利基氏・氏満・満兼と三代の菩提所として崇えました。

この寺はもと真言宗で能成寺といって、敷地はいまの八雲神社の隣りまであったが、弘安五年（一二八二）一遍上人が鎌倉に遊行されたとき、この寺の住職の公忍が上人の弟子となつて改宗して名を覚阿とあらため、寺号を別願寺としました。境内に入ると、右手に足利持氏の墓と伝える高さ三尺余の宝塔が立っています。塔身の四面に鳥居が彫られた珍しいものです。

持氏は、初代公方基氏の玄孫で幼名を幸王丸といいました。十三歳で父満兼の死によつて公方家を継ぎましたが、六代将軍義教のとき、執事の上杉憲実によつて永享十一年（一四三九）二月、叔父満直と共に討たれました。長男の義久は、宅間ヶ谷の報国寺に追われて自刃しました。



足利持氏墓（別願寺）



八雲神社

八雲神社のことを町の人たちは「祇園さん」、「佐竹天王さん」と愛称をもって呼んでいます。古老の話では神社は、御府内三社の一つで、松殿の祇園さん、甘繩の神明さん、坂ノ下の権五郎さんと呼ぶといいます。

八雲神社は明治初年までは「祇園天王社」といいました。むかし源義家の弟に新羅三郎義光といふ、の名人がいました。義光が後三年の役のため奥州に下る途中鎌倉に悪い病がはやっているのをみて、京都の祇園さまをここに勧請したのだといいます。

祇園さま（牛頭天王）は、元はインドの祇園精舎の守護神で除疫の神でした。貞観十八年（八七六）に藤原基経が自邸に牛頭天王を祀り、祇園精舎にちなんで祇園神社とよびました。いまは、御祭神に須佐之男命と出雲系の神々が祀られています。

◎参考書

鎌倉の散歩みち

吉岡睦草 83・1 山と溪谷社

鎌倉歴史文学散歩

小沢 彰 H4・12 有隣書房新社

鎌倉物語

小丸俊雄 81・1 きょうせい

鎌倉武士物語

今野信雄 91・5 河出書房新社

知られざる鎌倉

沢 寿郎 H3・10 鎌倉朝日

つわもの話

永井路子 S53・9 文藝春秋

相模のもののふたち

永井路子 S61・9 有隣堂

武藏の武士団

安田元久 S61・8 有隣堂

神奈川県の歴史散歩 90・10 山川出版社

交通公社のポケットガイド 鎌倉 S60・1

歴史と旅 特集 鎌倉の史話 50選 S59・4

歴史散歩事典 85・8 山川出版社

日本史年表 児玉幸多編 87・4 吉川弘文館

夷堂

夷堂橋 小町の南端にある本覚寺の門前^{アシキ}の滑川に架かる。小町通りの蛭子神社の前身は夷堂で、明治初年の神仏分離前までは、この橋近くにあった。幕府の鬼門除けに頼朝が祀ったといい、佐渡から帰った日蓮が、身延に立つまでの一時、この夷堂に逗留したと伝える。滑川もこの辺りは夷堂川と呼ぶ。

遠川橋 大印四ツ角からねずみ草の邊
川に架かる。川の名は名越谷から南流の
川が、途中、海とは逆な西北方へ曲折す
るのでついた。

乱播（亂穀） 村木座の向福寺門前から
わざか海よりにある。一はばかりの弓型
の欄干をそなえた小石橋で、石標が立つ
が、橋の感じがしない。元弘三年（一三
三三）五月の鎌倉攻めで、市街と海岸線に
布陣した新田軍を、若宮幕府（若宮大路東
側）と、小町の北条屋敷（三成寺の位置）
に寄せつけまいと死力を尽す北条軍が、
防戦に耐えず、ついに態勢を崩し、「乱
れ」たのがこの辺りと伝える。

日蓮寺
横須賀線の線路に沿つた細道を南進して
名越踏切を越えてすぐ左の

二百石ばかり、旧名越切通しにかかる旧道の路傍に湧き出る井戸水をいう。鏡子の井から至近距離である。重要五甲(一)

(一五三) 四月、三十一歳の日蓮は京から安房国小瀬の清澄寺に帰り、法華經を唱えるが、既成宗派に業られて小禁を受ける。

れ、かつての修行地蒙倉にきて、初めて
掘つた井戸と伝える。一説に日蓮が旅の
渴きに口を突き刺すと、水が湧き出たと
も、また日蓮が里人に水道を教えて掘ら
せたともい。旱天の年でも涸れること
なく、少量ながら今でも冷水が湧き出て
いる。昔は片瀬竜口寺の法華会やお金式
には、黄い水にくる信者多がかつた。

銚子の井（石の井）名越踏切を越えて百余メートル先の名越街道東側の人家の間にあ
る。井戸側は六角の石造りで、蓋も六角
の笠形、厚さ十三センチばかりの重厚な石造
りである。



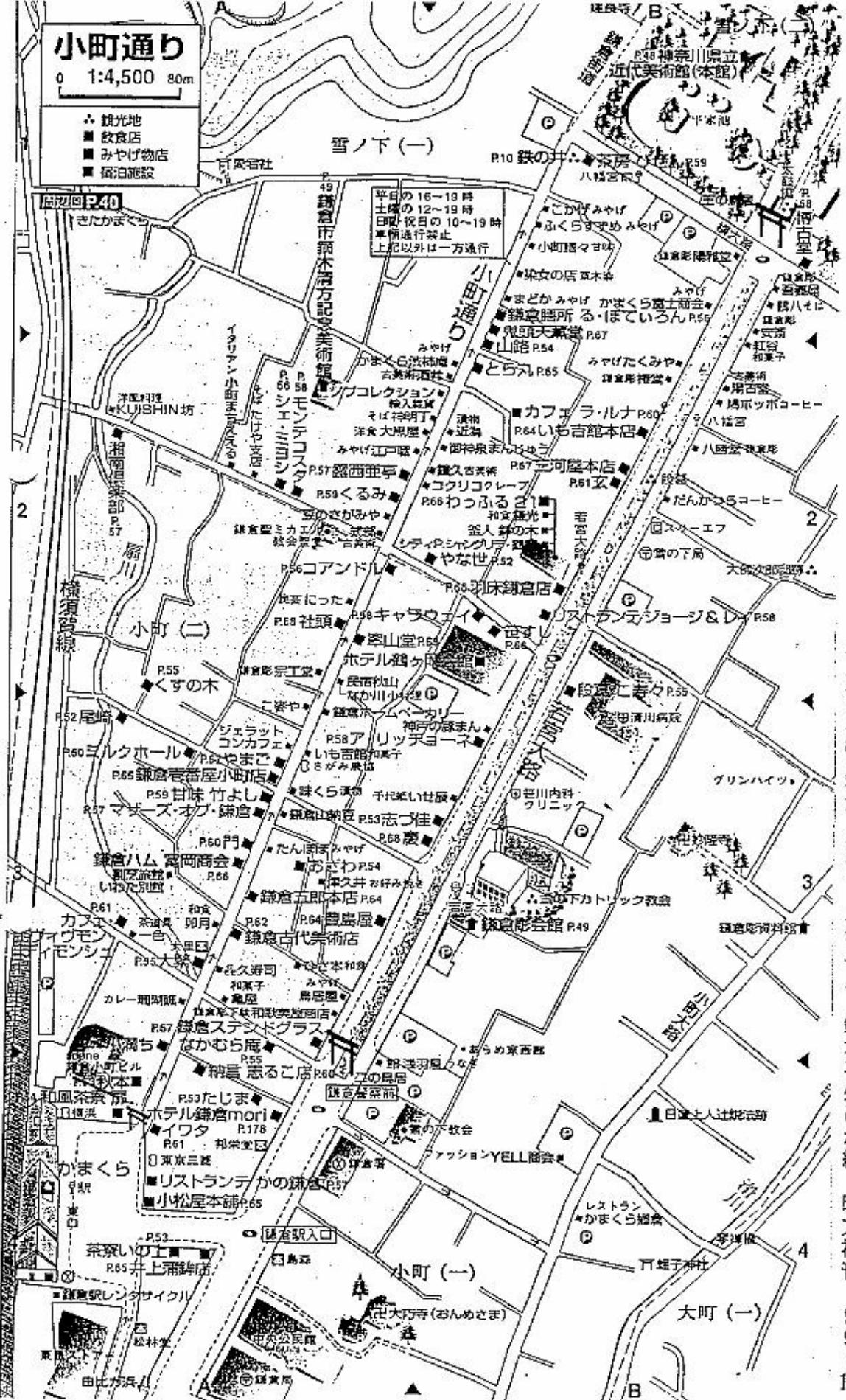
鎌倉時代 - 各年表

- 1063 (康平 6) 源頼義 鎌倉に八幡宮（元八幡）をつくる
- 1147 (久安 3) 源頼朝 生まれる
- 1180 (治承 4) 源頼朝 挙兵、鎌倉へ入る
八幡宮を現在の地へうつす
- 1181 (養和 1) 文覚、開基・源頼朝により補陀落寺をつくる
- 1184 (元暦 1) 源頼朝 大河土御厨を伊勢神宮に寄進
- 1185 (文治 1) 平家 渕ぶ
- 1192 (延久 3) 源頼朝 征夷大將軍に。鎌倉幕府開く
- 1199 (正治 1) 源頼朝 死す
- 1203 (建仁 3) 比企氏 渕ぶ
- 1204 (元久 1) 源頼家 死す
- 1222頃 (貞応1頃) 正宗 生まれる
- 1232 (貞永 1) 往阿 和歌江勝を築く
- 1243 (寛元 1) 良忠上人を開山とし北条経時、光明寺をつくる
- 1249 (建長 1) 越谷・建長板碑
- 1252 (建長 4) 日蓮 鎌倉に入る 松葉ヶ谷の草庵をきずく
- 1253 (建長 5) 仙覚 万葉集校訂を後嵯峨上皇に獻上
- 1260 (文応 1) 日蓮 立正安國論を書く
- 1268 (文永 5) 日蓮 龍の口の法難
- 1282 (弘安 5) 別顕寺 できる 日蓮 死す
- 1320 (元応 2) 大巧寺 現在地へ移る
- 1333 (元弘 3) 新田義貞 鎌倉を焼く
- 1336 (建武 3) 新田義貞 九品寺をたてる
- 1345 (貞和 1) 長勝寺 再興 本興寺たてられる
- 1354 (文和 3) 越谷・東方・六字名号板碑
- 1367 (貞治 6) 越谷・大道・七字題目板碑
- 1399 (応永 6) 佐竹上総介 大宝寺をつくる
- 1439 (永享11) 足利持氏 討たれる
- 1607 (慶長12) 常樂寺（ぼたもち寺）たてらる
- 1615 (元和 1) 妙長寺 現在地へ移る
- 1680 (延宝 8) 田代觀音を安養院へ移す

小町通り

0 1:4,500 80m

- ◆ 銀光地
■ 故食店
■ みやげ物店
■ 宿泊施設



〔上撰の旅〕鎌倉・湘南・三浦半島 鈴木喜生ほか編 昭文社刊